
微弱電流

小野瀬雪乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微弱電流

【著者名】

小野瀬雪乃

N4657F

【作者名】

あらすじ

これから僕は自殺する。神経症の「僕」が自殺に至るまでの道の
り。

手のひらに乗せた白い錠剤が誘つている。

やわらかい光とゆるやかな道への導き。

幸満はもつうんぞりしていた。この苦痛と怠惰な毎日。

昨日も今日のつづきをやって、明日はまた今日のつづき、永遠にも思える。

母さんは父とは違つ男のところへ逃避して、父さんは会社が倒産してこのところ落ち込みっぱなしだ。

びつじて自分の行く道はいつも棘だらけなんだね、理不尽だ。
同じ会社に通う人たちは楽しそうに喋つて、僕はその場所にいない
みたいで空氣のようで心もとない。

びつせ毎日同じ苦痛の繰り返しなり、今日で終わらせてしまおうと、
僕は白い錠剤を大量に飲んで死のうと思っていた。

何も出力できない。出力する手段がないことにどれだけ苦しんだろう。

それも今日でお終いだ。

錠剤をヨーグルトで流し込んで、ビニール袋で顔を覆いつもりだった。

精神科に通院して自然に集まってしまった200錠程の抗精神薬を、
シートからプチプチ剥がしながら自分が死んでしまった後の世界を
想像してみる。

おそらく僕が死んだら母は男のところから帰ってきて、大泣きしながら僕の葬式を行うだろう。もしかしたら半狂乱になるかもしれないけれど、それは彼女のスタイルであって、本当に心の底から狂うことはないので心配ない。

葬式には誰が来るだろう。高校時代の担任教師と、数少ない友人の智道、大樹、会社の先輩の橋本さんくらいだろうか。もしかしたらネット友達の雄介もはるばる大阪から来てくれるかもしれない。

この家はどうなつちやうんだろう。たぶんにも変わらない、父と母と弟が喧嘩しながらも仲良く生活していく。

母さんは男のところから帰つてくるだろうな、それはわかる。何故かつて、僕は母さんの無料カウンセラーをやって10年になるベテラン。母さんの行動の予想がつくくらい彼女を理解しているから。

彼女はもう40代になろうとこいつのこ、精神的に幼い。おそらく幼少期に父親（僕の祖父にあたる）から十分な愛情を受けていなかつたからだろう。

僕の成長期は、自分自身の成長と、母のトラウマを癒すといつ一つの大きな課題でめいっぱい破裂しそうだった。

まあ、男の方へ逃避してくれたおかげで、僕は自分自身の成長だけに集中することができるようになった。孤独な作業だけれど、これは生きるために重要だ。

たいていはこの作業に失敗して、高層マンションから飛び降りて死ぬか、拒食症になつちまって周囲を心配させるかのどっちか。まあ、色々なケースがあるけど、僕が見てきた結末はそんなところ。

結局僕も同じ穴のムジナだから、今こいつして薬を飲もうとしてるわけだけだ。

これから死のうというのに、こんなに落ち着いて行動できるとは思わなかつた。

朝起きて、「今日だ」と思った。

今日こそ僕の非生産的な人生を終わらせるのにふさわしい。

黒いTシャツとジーパンに着替えて、近くのコンビニまで自転車を飛ばし、無糖ヨーグルトと40リットルのでかいゴミ袋を買つてきた。

今日はまだ安定剤を飲んでいないので、自転車に乗つている時は頭

がグラグラして、周囲の景色がチカチカ僕の脳に向かつてシグナルを送つてきてた。これが嫌なんだ。いつもそつだ。

安定剤を飲んでいない時の世界の意地悪さはハンパない。

サングラス無しで太陽を見ているような、容赦ない脳への刺激。痛い痛い痛い。

それに慣れることは決してなく、いつも僕を憂鬱にさせる。

刺激過多による脳神経の疲労。

疲労の次に待つてるのは、一歩も動けない程の重圧。身体がずっと重くなつて、視線を上に向けることがあつづになつてしまつ。

思考は停止の一歩手前になる。

わずかに残る思考部分をフルに動かして、次の行動を決める。それ

がまた大変なのだ。

もし正常な判断をしなかつたとしたら、それは他人から奇行として捉えられ、余計な事件に発展しかねない。

何年も付き合つてきた自分の脳と行動の全てから、僕は次の行動を慎重に選ぶ。

怒鳴つたり、無口になりすぎたり、気分が悪いなどとは言つてはいけない。

絶対他人に弱みは見せたくないんだ。それは僕の唯一のプライドだ。

たいていは、その場をとりつくろつて、自分ひとりになれる場所・・

・トイレの個室などに避難する。

トイレの個室にはずいぶん助けられた。中学時代、高校時代、どちらも友達のやりとりや授業での刺激に疲れたら、大便に行くフリをしてトイレへ行けばいい。

まあ、そのせいで中学時代は「ウンミチ」（ウンコと幸満の「満」をもじったのな）と呼ばれることになるわけだけれど。別に虚められ、馬鹿にされるのは慣れていますのでどうでもいい。

外部からの刺激が遮断できるメリットに比べれば、そんなガキの戯言ぐらいい我慢できる。

まあ、そのくらい世界は僕に攻撃的だったってこと。シェルターが必要なくらいに。

父さん、母さんにそのことを語つてみたけれど、全く伝わらなかつた。

世界から発せられるあの過剰な程の刺激が、彼らにはたいしたことがないものらしいのだ。

理解されないのは予想していたけれど、それを「氣のせい」で片付けられるのにはウンザリした。

僕には一大事なんだ。一生世界から攻撃され続けなければならないのか、この脳味噌で楽に生きて行けるとは思えない。何故わかつてくれないんだ。

せめて脳病院に連れて行ってくれるよう頼んだけれど、母は「幸満ちゃんは少し神経質なだけなのよ。おじいちゃんもそうだったもの。気を落ち着けて、三食きちんと食べて、よく眠れば良くなるわよ」と言いやがった。

高校時代、僕は産まれつきのアトピーが酷くなっていた時期があった。

両手の指が見るのは辛い程にただれている。まるでスプラッシュタだ。産まれつきホラー要素を持ち合わせたので、僕の精神にはぐじゅぐじゅに膿んだ部分が出来てしまった。それも世界が僕を攻撃する理由の一つかもしれない。

アトピーはわかりやすい。外見ですぐ判断できるからね。

母に膿んだ両の手を見せて、皮膚科に行きたいから保険証と金をくれと言つたら、あっさり了解してアイテムをくれた。本当は脳病院に行くためのアイテムを。

さて、僕は家の最寄り駅まで自転車をこぎながら、ビニル袋の脳病院があるのか考え始めた。

駅付近の商店街にあるメンタルクリニックはまずい。母の知り合いに見られていたら、ばれてしまつ。

色々頭の中を検索しているうちに、5駅先に設置してある宣伝看板を思い出した。

たしか心療内科だったはずだ。

記憶力の悪い僕が覚えていたという事は、かなり重要な情報だったんだろう。そして今役に立つたわけだ。

そうと決まれば即行動だ。もうこの苦痛には飽き飽きしている。解放されたい。

どんな治療が行われるのだろう。きっと、僕のこの辛い経験をじっくり聞いてくれて、「よく我慢してきたね。」と慈悲の眼で見てくれるに違いない。

5駅先の心療内科は小さく汚いビルの2階にあった。

足が震えてきた。ここは脳になんらかの障害を抱えた連中が来る場所だ。

奇声を上げる奴とか、焦点の定まらない目をした気持ちの悪い奴なんかがきっといるだろう。

そう思つたら血の気が引いて、2階へ続く階段を上がるのを途中で止めようとしたが、せっかくのチャンスを無駄にするのも馬鹿らしい。

吐き気を抑えながらやっと階段を上り、ドアを押し開いた。

白かったであろう壁が黄ばんでいる。思ったより狭い待合室で、枯れかけた観葉植物がより空間を狭く見せていて。

震えながら受付のおばさんに、初診であることを告げ、保険証を差し出した。

やつとこの苦しみを打ち明け、解放してくれるお医者さんに会つことが出来るのだ。

期待と恐怖感が半分くらいな気持ちで僕は待合室のパイプ椅子に腰掛けた。

周りを見渡すと、4人ほど待ち人がいて、特に奇声を上げたりしている変な奴はない。

よく観察すると、雰囲気が常人と違っているのは感じ取れたが。

自分自身の苦しみを、やつと専門家に告白することができるここ僕は興奮していた。

待ち人数が一人ずつ減つていき、僕の番になった。

目の前にあるドアを開け僕の苗字を読んだのは、頭の禿げ上がった、

犬みたいな顔をしたずんぐりむつくりのおじさんだった。

診察室に通される。待合室をより黄ばませたような狭い部屋で、机をはさんで椅子が置かれ、おじさん側には灰皿がある。

座り心地の悪い椅子に腰を下ろし、精神科医であろうオッサンの顔を盗み見る。

大きな目の彼は僕の顔を静かに見ながら、

「川本さんは初診だね。えーと。どういったことで悩んでいるのかな？」

と聞いてきた。

急に涙が出てきた。今までの辛い出来事が頭の中でシャッフルされて、洪水のように脳の中心を刺激する。

それでもなんとか涙を止めようと、僕の理性があがいている。

ぼろぼろ泣く僕に驚きもせず、オッサンは「ティッシュがそこにあらから、涙と鼻水拭いて。」と言いやがつた。

その言葉で僕は理性を取り戻し、今までの経緯を語ることができた。相手に解るように、具体的な例までそえて。

具体的な例に、デパートでの件を挙げた。デパートなどの光や物が多い場所へ行くと、それら全てが自分の目の中に入ってきて、刺激で混乱してしまうこと。

混乱の次には、身体が動かなくなるほどのだるさに襲われる」と。

「・・・なるほどね。では軽い安定剤を処方しましょう。それを飲めば、君の言っているような症状は緩和されるよ。ソラナックスといつ安定剤を出すから、受付でもらってね。で、様子をみたいから一週間後にまた来てもらえるかな。」

オッサンはそう話しながらカルテに何か書き込んでいる。

え・・・・・そんなに簡単に僕の苦しみを片付けるのか？

だつて、ここまで来るのに並々ならぬ覚悟と期待をしてたんだぜ。震えながら階段を上った僕の努力はどうなんの。

精神科医であろう犬顔オッサンの簡素な対応に、僕は肩透かしをくらった気分だった。

薬を処方してそれで終わり。苦しみに共感さえしてくれず、カルテへの記入と薬の処方だけをした奴の態度に若干腹は立つたが、次は

「安定剤」という薬を飲めば症状が緩和されるという言葉に期待し始めた。

ソラナックスという名の安定剤は、僕の生活をガラリと変えてしまった。

それまでの目からの刺激が大分抑えられ、後頭部のつっぱりが緩まる。

副作用にはふらつきや眠気、というものがあるらしいが、軽い眠気は感じられても、その副作用にありあまる程の効果があった。

刺激ばかりだった生活に、やっと訪れた静寂。

なんてこの世界は優しいところだったのだろう。

以前は殺意を抱いていた相手にさえ、笑顔で接することが出来る。人格まで変わってしまったようだ。

安定剤バンザイ！！！僕の人生を教えてくれた薬！！！

それから僕の高校生活は安定していった。安定剤を飲むことによつて。

そのまんまだよな。

少なかつた友達とも以前より楽に接する事ができるようになった。トイレの個室へ行く回数も減つた。

もちろん、精神に影響を及ぼす薬を飲んでいるなんて周囲には感付かれてはいけないので、薬を飲むときは特に注意した。

制服のズボンのポケットに錠剤のシート（4錠ほど）を入れ、校内の人気がない場所でこつそり飲む。水無しで飲めるほど小さいので、

口の中に唾を少し溜めて薬を放り込めば〇〇。

それから僕の脳内には変化が起きる。

じんわり背筋を上つて来る気配を感じる。身体の緊張が溶け、後頭部のキリキリ感がなくなり、気持ちが穏やかになつてゆく。

ああ、神様、僕をこの世界に存在させてくれてありがとう。

普段、神様なんて信じない僕が、敬虔なクリスチヤンのような気分になつていてる。

なんて素晴らしい薬だろう。

母もこの薬を飲めば、あんなにヒステリックに怒鳴らなくてもすむのに。

でもこれは僕だけの秘密。誰にも知られてはいけない。

知られたらキチ イ扱いだ。特に狭いこの高校生活の中では。

白い錠剤が僕を誘惑している。

やつと「僕を終わらせる口」が来た。

あれから高校生活を無事終えた僕は、ある会社へ就職したのだ。

安定剤をもつてしまも、僕の根本的な変人ぶりは変わらなかつた。それが原因で社長から目をつけられ、蔑まれ扱い使われる蛆虫のような存在になつてしまつた。

会社の誰もが僕を蔑んでいる。

唯一の趣味、映画鑑賞さえも、会社でのひどい扱いの記憶から逃れるためのショルターになつてくれなかつた。心の傷が多すぎて、自然治癒する速度に追いつかないのだ。そして、それらの傷はどんどん膿み、治療不可能なほどに大きくな

つてしまつた。

会社の奴らが憎い。幽靈つていうもんがいるなら、僕はそれになつてあいつらを呪つてやろうと思つ。

だけど、結局は僕の奇抜さがいけないんだ。わかつてゐる。

中学・高校と、僕は周りに溶け込めなかつた。ファッショング雑誌の記事なんかを読んだり、流行りのドラマやなんかを見て勉強してみても、何をしても、僕は周囲へ溶け込むことができなかつた。

まるでジグソーパズルのなかで僕のピースだけがどれとも繋がれないように。

どこに行つてもあてはまらない。夜、布団の中でそれを考えては涙したものだ。何故、何故、といふら考へても答えは解らなかつた。

社会に出たらどうなるのだろう。そう、高校時代に思つたものが、まさか本当に社会でもつまはじきにされるとは思わなかつた。だって、僕は精一杯、努力してきたつもりだから。

結果、200錠程の白い錠剤を目の前に、死を決意しているわけなんだけビ。

もう涙は出なくした。泣き虫であることを知つてゐるのは自分だけだ。

親の前でさえも泣かないからね。

さて、そろそろこの世ともオサラバだ。

コンビニで買つてきた大きいヨーグルト容器に、抗精神薬をザラザラと落とし込む。

溶けないうちに、胃に流し込まないとな。味もなにもわからぬくらいの勢いで、ヨーグルトを流し込む。

あ――――――。

頭がグラグラしてきた。僕の魂はどこへ行くのだろう。ラジカセからじゅじゅじゅの曲が流れている。最期に聴くならこのアーティストだと考えていた。

この世界との接点はなくなり、身体から魂が離れ、僕は自由で純粋な存在へと変化する。

ビニール袋を被らなきや・・・・

抗精神薬を大量摂取するくらいで人は死なないからね。ビニール袋での窒息死を狙つてるんだよ。早く、早く被らないと・・・・・・・・

長い長い夢を見ていたようだった。

瞼を上げると、心配そうな表情をした父さんと母さんがベッド脇に座っていた。

どうやら病院の救急救命へ運ばれたらしい。

「幸満ちゃん・・・・・・」涙を浮かべながら母さんが言ひつ。

「ビニール袋、被り忘れちゃつたみたい。」僕は微笑みながらそつづぶやき、意識を失つた。

次に意識を取り戻したのは、誰かが点滴の様子を見に来た時だった。看護士さんらしい。

なんだかとても大便がしたくなり、朦朧とした意識のまま「すみません、トイレへ行かせてください」と頼んだ。ベットの上でするかどうか聞かれたが、それは屈辱的に思えたので断り、車椅子でトイレへ連れて行つてもらつた。

点滴は薬を浄化する作用があるらしいが、墨のように黒い大便を、僕は何回もした。

3日間くらいだろうか。やつと退院できる状態になり、母さんから渡された服を着て、病院を後にした。

入院費が5万くらいかかったらしい。少し申し訳なく思った。

まあ、今回の自殺計画は失敗したわけで。

その後の僕は両親からとても優しくしてもらえた。

予想していた通り、母さんは男のところから帰ってきた。

会社は辞める事となり、僕は今二ートだ。親のすねかじりつてやつ。

父さんと母さんはしばらくゆつくりしろ、と言つてくれている。
これから先の人生設計なんかを考えながら、何ヶ月か休ませてもらおうと思つ。

こんな欠陥品が生きているのは申し訳ないけれど、一度死ぬ氣で自殺してみると、なんだかスッキリした気持ちだ。

もっと努力すれば、いつかこの世界とも折り合にがつけられて、楽しく生きていくことができるようになるのだろう。
僕はまだ若いのだから。諦めるのは早すぎる。

そんな淡い期待を抱いていた7年前。
僕は、今日

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。
大部分が自分で経験したことなので、今後も作品を書けるかはわから
りませんが、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657f/>

微弱電流

2010年10月20日19時45分発行